【俺】「ちょこまかと逃げやがって！　追い詰めたぞ！　覚悟しろ！」
俺こと観束総二は、テイルレッドという少女に変身し、エレメリアンという怪人を追い詰めていた。
エレメリアンは人間から属性力を奪い、その人間からその属性に対する興味を失わせてしまう。
ツインテール好きの俺として、見過ごせるはずがない。
そうして俺は、テイルレッドに変身し、
日々戦っているのだ。
【怪人】「くっ…こうなったら奥の手を…」
怪人はまだあきらめていないようで、懐から何かを取り出した。
どんな武器か分からず身構えたが、それはスマホのようなものだった。
この期に及んで何のつもりなんだろうか？
俺は怪人の意図を読む事が出来ず、怪人とそのスマホを警戒した。

【怪人】「…こいつを見てみろ」
【俺】「っ！？　そ、それは…トゥアールかっ！？」
スマホの画面には、牢屋に監禁されたトゥアールの姿が映し出されていた。
トゥアールは、俺が装備しているテイルギアを作った研究者であり、何より大事な仲間だ。
彼女が捕らえられたのは致命的だ。
【怪人】「くっくっく…これでもまだ戦うか？」
【俺】「このっ…卑怯者めっ…！」
【怪人】「安心しろ。大人しく命令に従えば開放してやろう」
仲間を人質に取られてしまっては、もうどうしようもない。
俺は怪人の命令に従うしかなかった。

【俺】「…で、なんなんだよここは…こんな所にトゥアールがいるのか？」
【怪人】「クックック…黙ってついてこい…」
俺は怪人に案内され、地下洞窟の中へと入って行くと、壁面が肉の壁のようになっている場所へとたどり着いた。
見た目通りの甘ったるく生臭い匂いが漂い、軽く胸やけしそうになる。

【怪人】「そろそろ体が熱くなってきただろう？」
【俺】「…体が熱く…？　まさか、この匂いが…？」
確かに、俺は下腹部のあたりが熱くなっている事と、体が軽く痺れている事に気が付いた。
この匂いは麻痺毒か何かなのか。　だが気づいたときにはもう遅い。
俺は満足に体を動かせないまま、壁から出て来た肉に絡みつかれ、自由を奪われる事になった。

【俺】「ひっ！　な、なんだこいつっ！　絡みつくなっ！」
【怪人】「クックック…良く似合っているぞ…」
肉の壁から生えて来た触手は、あっと言う間に俺に絡みつき、
俺の体の自由を奪っていく。
ぬめりを帯びたその触手から放たれる匂いは、
ますます俺の体を火照らせ痺れさせる。

【俺】「うぐっ…はぁっ…はぁっ…」
【怪人】「呼吸が荒くなってきたな？　どうだ？
下腹部が熱くなって、疼いてくるだろう？」
怪人の言う通り、下腹部の疼きが強くなり、そしてパンツの中がぬるぬるに濡れ始めているのが分かる。
俺は身をよじり触手から逃げようとするが、それはかなう事なく、完全に自由を奪われてしまった。

【俺】「くっ…こ、こいつ……！
いい加減にしないと……！」
【怪人】「クックック…いいのかな？
お仲間の事を大事に思うなら
大人しくしている事だ」
【俺】「くそっ……！ トゥアールには
手を出すんじゃないぞっ……！」

俺は全身からエネルギーを放ち、触手を吹き飛ばそうとするも、
トゥアールを人質に取られている事を思い出し、思いとどまる。
そうしているうちに、触手はどんどん俺の体に絡みつき、
まったく身動きが取れなくなってしまう。
そして、触手が放つ匂いのせいか、俺は下腹部の熱だけでなく、
肌全体が敏感になっているようで、触手が全身を這いずると、
そのくすぐったさとおぞましさに、体をビクンと震わせてしまう。

【俺】「ひっ！　う、薄気味悪い…」
【怪人】「この程度で気色悪がっていては、この続きは我慢できないぞ？」
【俺】「やめっ……！　ひぐっ！？」

触手は歯を食いしばっていたが、触手の1本に無理やり口を開かされ、触手をねじ込まれてしまった。
口いっぱいに生臭さと甘ったるさを感じる粘液が吐き出され、それが無理やり胃袋の中に流し込まれていく。
同時に、胃が強烈に熱くなり、その熱が全身に広がっていく。

【俺】「むぐっ！？　んんんっっっ！？」

意識しないようにしていたが、全身に広がるこの感覚で、自分が発情させられている事を、否応なしに意識させられてしまう。

そして、俺が自身の発情を意識した直後、
愛液で湿ったパンツをずらし、触手が潜り込んできた。

《ブチブチッ…ずにゅうううっっっっ》

【俺】「うぐっ!? あああぁぁぁっっ!!」

処女膜を引き裂く痛みが一瞬伝わった後、
ぐねぐねした柔らかいものが、膣肉をかき分けて、
自分の体の中に入ってくるおぞましい感覚が広がる。
しかしそのおぞましい感覚も、下腹部に感じていた熱と
混ざりあい、くすぐったい気持ち良さに変換されていく。

【怪人】「クックック…いいざまだな、テイルレッド」

俺は男なのに、怪人に見られながら、処女を失ってしまった。